

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

体育座りをして、濃紺のうこんの海と水色の空の境目を見つめる。孝俊たかとしと保生やすおは草の上に大の字になって、顔に帽子をかぶせて陽をさえぎっている。つかの間の休憩まやすげだ。

おれは自分の手足を動かして、それを不思議な気持ちで眺めるなが。こうして動くのがなぜか突然おかしなことに思えてくる。自分の心と身体がぜんぜん一致していないような、奇妙な感じだ。

あ、まただ。理由もなくむしゃくしゃする。心というものが、使い古しの歯ブラシのように、てんでばらばらにあらゆる方向に向かってささくれ立っている感じ。

炭酸水のプールに飛び込みたいと思う。身体中からシユワシユワと気泡きほうを出して、すっきり、しゃきつとしたい。今ここから思いっきり飛び込めば、^①もやもやする気持ちは消えるだろうか。炭酸水ではなくて海水だけど、少しはまともになるだろうか。

おれは、一度着たTシャツを脱いで立ち上がった。そのときだ。
「こんにちは」

突然の声に、思わず肩が持ち上がる。振り向くと、そこにはタオがいた。驚いた。まったく気が付かなかった。

「飛び込み？」
「あ、ああ、そうだよ」
「あ、ああ、そうだよ」

^② 声が裏返ってしまった。気配を察したのか、孝俊と保生が上体を起こす。

タオの姿を見て、孝俊が眉根まゆねを寄せた。保生は困り顔だ。タオは二人の様子におかまいなしで、崖がけの先端まで行き、

「ここから飛び降りるの？　すごいなあ」
と、質問なのかひとり言なのかわからない一本調子で言った。それから崖を見下ろして、遠くの海を見て、手をかざして空を見て、また海面に目をやるといふ動きを何度か繰り返した。

気まずいのはおれたちのほうだった。なにを話しているかわからないし、孝俊がイラついているのも伝わってきた。タオは暑いなあと言って、首に巻いたタオルでのんびりと額の汗を拭ぬぐいたりしている。

^③ 「お前もやってみ」
突然、孝俊が口を開いた。

「え？」
「飛び込みだよ。簡単だよ。ここではみんなやってる。ここに住んでるなら、お前もやれ」

タオは涼しげな表情で、どうかなー、厳しいだろうなー、と誰にともなくつぶやいている。
「やってみーって」

「えー、やるなー、孝俊」
思わず声をかけた保生を、孝俊がにらむ。

「港のほうでよくやってただろ。同じさー」

孝俊がおおる。確かに午前中にやった宗見港そうみのほうの防波堤ぼうはていでは、タオが飛び込みをしているのを何度か見かけたことがあった。タオは飛び込みよりも、シユノーケリングが好きな様子で、シユノーケルと足ひれを着けて、海面をバチャバチャと泳いでいるのをたまに見かける。この人間で、泳ぐときにシユノーケルや足ひれを着ける奴やつなんていないから、いやでも目立つ。

「飛び込んでみー。気持ちいいよ。泳げるんだろ」
「いや、ほくはあまり泳ぎは得意じゃないよ。フィンがないと無理だと思う」

ああ、足ひれのことをフィンと呼ぶんだ、とおれはそんなことを思った。

「無理しないほうがいいよ」
保生が言い、

「そうだよ、この高さはきついよ。やらん方がいいよ」
と、おれも加勢した。海で無理をしてはいけないことは、身体がよく知っている。

「お前たちは黙れ。どうか、タオ。やらんのか」
タオは少し考えるような素振りを見せてから、「やめておくよ」と言った。

「港のほうで練習して、もつと泳げるようになったらいつか挑戦したい」
「使えんな。だから東京人はダメなんだよ」

タオは^④。その表情でまた孝俊がイラついたのが見てとれた。

「ここ、何メートルあるの？」
「六メートルくらいじゃないか」
と、おれは答えた。タオは崖の下を興味深そうに覗きのぞき込んでいる。

「高いなあ」
しみじみと言う。

「高くない。やってみー」
孝俊がタオの後ろに立った。

「足をここに掛けて、一歩進むだけ」
タオが崖に足をかける真似をした。孝俊がもう一歩近づく。

「孝俊、やるなよ。わかってるよな」
保生が少し大きな声を出した。おれは、まさかと思っていた。いくら孝俊だって、そんなばかな真似はしないだろうと。孝俊がほんの一瞬いっしゆん、おれたちのほうを見た。

「孝俊」
保生が再度、声をかけた。その次の瞬間、孝俊がタオの背中にすつと手を伸ばしたのが見えた。

「やるなっー」
保生の声と、タオの破裂音のような短い悲鳴が聞こえた。タオが手をばたつかせ、海に吸い込まれていくのがスローモーションのように見えた。

「タオッー」

保生が叫ぶ。長い時間に感じられた。突然、盛大なしぶきがあがり、タオが浮かんで、また沈んだ。大きなしぶきが立つ。おぼれているのだ。

保生がすぐさま飛び込んだ。考える間もなく、おれも続いた。タオは無様に手足を動かして、必死に保生にしがみついた。

「タオ、大丈夫ー 落ち着け、落ち着けー」

タオは無我夢中で手足を動かす。完全にパニックになっている。このままでは、こつちまでおぼれてしまう。

「大丈夫やさー！ 落ち着けー」

おれもタオにしがみつかれて何度も顔が沈み、海水を飲んだ。鼻が痛い。目がしみる。

保生と二人で、なんとかタオの左右の脇に肩を入れ、必死で岩場まで連れて行った。

「タオ、大丈夫かっ」

タオは激しくむせている。その顔は真っ青だった。眼球が泳いで白眼になった。

「タオッー！ しっかりしえー！」

タオはそのまま意識を失った。

「お前はなにをしているかっー」

孝俊は、父ちゃんに大目玉を食らい、おれと保生の前でガツンと二発ぶん殴られた。

今回のことはあつという間に知れ渡った。気絶したタオをどうしたらいいのかわからずに、大人たちを呼びに走ったから、当然といえば当然だった。

タオの意識はそのあとすぐに戻ったけれど、ひとつ間違えれば、大変なことになっていたかもしれないのだ。

なぜ一緒にいたのに止めなかったのかと、保生もさんざん父ちゃんに怒られ、おれも母ちゃんにこつびどく叱られた。夏休みだというのに校長先生にまで話がいき、おれたちは学校に呼び出され、こんこんと説教をされた。転校生のタオだったから、というのもあつたと思う。島の子ども同士だったら、ただのおふざけで終わっていたかもしれない。

「父ちゃんからも言ってください」

漁から帰ってきた父ちゃんをつかまえて母ちゃんが言い、おれは黙って下を向いていた。すでに父ちゃんの耳にも入っているのだつた。

「もう十分怒られただろ。征人はちゃんとわかっているさ」

父ちゃんは、おれにはなく母ちゃんに向かって言い、おれの肩に軽く手をやって、そのまま風呂場に行ってしまった。なんともいえない気分だった。

翌々日、三人でタオのお見舞いに行った。タオはすっかり体調がよくなったのか、いつも通りの様子



で、本を読んでいた。

「タオ、ごめんな」

「本当にごめん」

おれと保生は頭を下げた。^⑤孝俊は口をつぐんで、一緒に頭を下げるだけだった。タオは首を振って

「いい経験させてもらったよ」と、唇の端を持ち上げた。笑ったのだと思う。タオおちのおじさんも、男の子は仕方ないよなあ、とにこにこ笑っていた。

タオの家は本だらけだった。本棚に入りきららない本が、そこらじゅうに無造作に積み重ねてあった。ここだけ別世界のように、おれはちょっと興奮した。夢中で眺めていたら、おじさんが、「読みたいものがあつたら持っていっていいよ」と声をかけてくれたけど、そもそもどれが読みたい本なのかすらわからなかった。

帰り際、おじさんが、

「タオとまた遊んでやってください」

と急にかしまつて言い、おれたちはへどもどして頭を下げて、タオの家をあとにしたのだった。

「孝俊、ちゃんとタオに謝るまでおれは許さん。命にかかわることだ」

タオの家からの帰り道、保生が厳しい口調で孝俊に詰め寄った。こんな保生を見るのははじめてだった。これまでも孝俊はどこか、おれと保生を子分のように扱っていたし、リーダーシップのある孝俊の言うことは、おれたちも自然と受け入れる態勢になっていた。孝俊に面と向かって歯向かうなんて、これまで一度もなかったことだ。

「……冗談のつもりだったんだけどよ」

父ちゃんに殴られて目の下を紫色にした孝俊が、ぼそりと言う。

「冗談ですむか。わかってただろ」

保生の言葉に孝俊は黙っていたが、保生はかまわず続けた。

「そもそもお前の考え方におれはついていけない。新しく来た人がなんで悪い。ここに住むんだよ。天徳の人間はどんどん減ってる。感謝するんじゃないかって、いじめるんか。おかしいだろ。内地人も、本島の人間も、この人間もみんな同じ。差別するな」

しばらくの沈黙のあと、孝俊が口を開いた。

「……天徳を勝手に荒らされてもいいんか。これまでの神事がなくなってもいいんか」

「荒らされてもいいって言ってない。内地人が間違っているのは、決まりを知らないからさ。立ち入り禁止の場所とか、この決まりをちゃんと教えればいいだけさ。それもしないで文句だけ言うのはおかしい」

「おばあちが許さんからしょうがないだろ。看板ひとつ立てるのも、神様がいいって言わんし」

「神様の答えを何年も待っている間に、なにも知らん内地人が来て問題になつてるわけだろ。神様も

注 内地人―一般に沖縄の人が沖縄以外の日本人を指して言う言葉。

大事だけど、生きている人間がなにかするほうが大事っておれは思う」

「保生はこの神様とか、おばあちをばかにしてる」

「してない！ 逆、大事にしてる」

今まで見たことのない、おれの知らない保生だった。保生はいつでも穏やかに笑っていて、争いごとを好まないし、小さい子や女子にだってやさしい。学校で先生に指されても、ほけつとしていてしばらく気が付かないこともあるくらいののんびりした男だ。

「征人はどう思う」

孝俊に急に振られて、どう言おうか一瞬悩んだ。孝俊の気持ちもわかる。孝俊は天徳島が大好きで、とても大事に思っているということはちゃんとわかっている。でも、それでも、今回の件は見過ごせなかった。

「……保生に賛成」

孝俊の目つきが鋭くなる。

「そうか。確かに、タオのことはおれが悪かった。だけど、天徳のこととは話がべつ！」

「べつじゃない！」

保生が間髪を容れずに返す。

「もういい。おれが嫌なら、一緒に遊ばんくていい」

孝俊が背を向けて歩き出した。

「待って。まだ話終わってない」

保生の声を見無視して、孝俊は自転車に乗って行ってしまった。保生と顔を見合わせる。

「なんでよー」

保生は怒っているのではなく、悲しんでいるのだ。

(中略)

いろんな感情がぐるぐると渦巻いていた。今ここで言葉にするのは難しかった。

「あ、あのさ、さっきの保生、かっこよかったよー。見直した。尊敬する」

「どこがよー。なに言ってる」

「「このことちゃんと考えてるんだなって思ったさ。おれは保生の言う通りだと思うけど、孝俊も、あれはあれで天徳のこと考えてるんだよな。どっちもすごいさー」

おれだけだ。おれだけ、なにも考えていない。早くこの島から出て、新しい景色を見たいと思っている。

「おれはただ、みんな仲よくしたいだけ。天徳のことなんて正直興味ないよー、でもさー。そのために、内地から来たタオがいじめられるんだったら、この問題を解決しないと」

保生の言葉に、自分でもわからないなにか喉元をせり上がってきて、鼻の奥がつんとした。とっさに鼻が詰まったふりをしてごまかした。

(椰月美智子「14歳の水平線」による)

問一 —— 線部ア「眉根を寄せた」、イ「へどもど」の意味の説明としてもっとも適切なものを次の1～4の中からそれぞれ選び、その番号で答えなさい。

ア 1 どうしてよいかとまどった。

2 大人のように振る舞った。

3 不快な表情を浮かべた。

4 泣きそうなそぶりを見せた。

イ 1 相手に気に入られようと機嫌を取る様子。

2 自分の行動を反省して恥じ入る様子。

3 みじめさに耐えきれず落ち込む様子。

4 不意をつかれてうろたえる様子。

問二 —— 線部①「もやもやする気持ち」とありますが、「おれ」はどうしてそんな気持ちでいるのですか。本文をふまえて具体的に二十字以上二十五字以内で説明しなさい(句読点、記号も一字に数えます)。

問三 —— 線部②「声が裏返ってしまった」とありますが、それはどうしてですか。もっとも適切なものを次の1～4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

1 むしゃくしゃしているときに突然話し掛けられて、頭に血が上ったから。

2 ひとりで思い悩んでいる心の中を、のぞき込まれたような気がしたから。

3 ふだん仲間はずれにしている転校生に話し掛けられて、気まずかったから。

4 学校で禁じられている飛び込みを見つけられ、告げ口されると思ったから。

問四 — 線部③「お前もやってみ」とありますが、どうして「孝俊」はそう言ったと考えられますか。もっとも適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

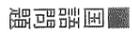
- 1 東京から来たタオがなかなか仲間には溶け込もうとしないため、リーダーである自分が何かきつかけを作ったあげようと思ったから。
- 2 いつも言いわけばかりで意気地のない転校生のタオに、島の先輩として、海の気持ちよさや美しさを教えてあげたいと思ったから。
- 3 タオが天徳島の外から来たことにも、つかみどころのない態度にも、常々嫌悪感を持っていて、意地悪をしてやろうと思ったから。
- 4 転校生のタオの、捉えどころのない態度や表情を薄気味悪く感じ、きついことを言って、一刻も早く立ち去らせようと思ったから。
- 5 タオの態度を見ていると自分を軽んじているようなので、リーダーとしての威厳を示しておどかしてやろうと思ったから。

問五 ④に入れるのにもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 ばかにするなといった顔でにらみつけた
- 2 意味がわからないといった顔で首をかしげた
- 3 ふゆかいな奴だと表情をくもらせた
- 4 けんかを売るのかと口をとがらせた

問六 — 線部⑤「孝俊は口をつぐんで、一緒に頭を下げてただけだった」とありますが、この時の「孝俊」の気持ちはどうであったと考えられますか。もっとも適切なものを次の1〜5の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 島の子ども同士なら大ごとにならないのに、親や学校に説教されたことに納得がいていない。
- 2 自分が親や学校にこっぴどく叱られたばかりでなく、友人にも迷惑を掛けたことを反省している。
- 3 リーダーなのに、調子に乗って級友を海へ突き落としたことが恥ずかしく、居心地が悪い。
- 4 内地人に対しての嫌な感情は消えていないが、危険な目にあわせたことはすまないと思っっている。
- 5 本当のところ怒りは消えていないが、あやまっておかないとタオの父親に叱られてしまいそうでこわい。



問七 — 線部⑥「男の子は仕方ないよなあ」とありますが、このように発言したのはどうしてですか。もっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 子どものことは子どもに任せるべきだと判断したから。
- 2 自分たちはよそ者なので、耐えるしかないと思ったから。
- 3 息子が島にやっとうち解けたと分かり、安心したから。
- 4 孝俊たちの過ちをとがめず、円満に納めようと思ったから。

問八 — 線部⑦「逆、大事にしてる」とありますが、どういう意味ですか。もっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、その番号で答えなさい。

- 1 みんなで仲良くすることが、天徳島の土地や神様を守ることだということ。
- 2 内地人にも分かり易く土地の決まりを教えることが、何よりも大切だということ。
- 3 新しく来た人の意見を聞くことが、天徳島の未来を守ることだということ。
- 4 古い決まりにとらわれず、生きている人間の問題を解決することが大切だということ。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「もしも心がすべてなら、いとお金はなんになる」という言葉があります。

① 含蓄かんじやくがあつてわたしは好きなのですが、誰が言ったのか。フランク・シナトラが唄うたっていると寺山修司さんがどこかに書いていましたが、誰もどの歌か教えてくれません。オルグレンという作家の言葉だという話もありますが、まあ、誰が言ったにせよ、この言葉には面白いニュアンスがあつて、何だか洒落しゃれた都々逸ととえつを聴いているような気がします。お金に対する距離感がいいんですね。同時に、心がすべてなんていう ② もいいと思います。

しかし、わたしたちが今生きている現実に当てはめるならば、「もしもお金がすべてなら、いとお金はなんになる」と言い換えたほうがいいような気がします。いつの間にか、わたしたちが生きている世界には、それほど ③ 金銭一元的な価値観まねんえんが蔓延まんえんしてしまっています。

もう誰も、心がすべてだなんて言いません。現代ほど、お金の万能性信仰が高まった時代は、かつてなかったのではないのでしょうか。資本主義の発展段階で、つまり産業革命を経て、生産能力が大幅に増大し、その延長線上にあるわたしたちの世界には商品が溢あふれるようになりました。世界はあたかも、商品の網の目のようになり、わたしたちの生活の豊かさとは、ほとんどわたしたちが手にすることのできる商品の豊かさと同義語になってきています。幸福の具体的なイメージは、大きく快適な家に住んで、緑の芝生の庭を眺め、最新型の自動車です。ライプシ、高級家具に囲まれ、レストランでおいしいものをいつでも食べられる生活だというわけです。おそらく、わたしも含めて、誰もが、この幸福のイメージを否定することは難しいだろうと思います。そして、これらのものは、すべてお金で交換可能なものなのです。

もちろん、これは誇張こしょうした言い方です。しかし、これが誇張であるということを理解することが難しくなっているのも確かなことだろうと思います。現代を特徴付けている消費資本主義がつくり出す社会とは、身の回りのすべてのものがお金と交換可能であるような社会であると言つてもいいかもしれませぬ。それゆえに、④ このすべてのものと交換可能なお金という商品の万能性が信仰の対象になっているのだと言えるでしょう。

マルクスは、資本論を商品の分析から始めました。商品とはひとつの価値形態として流通し、その最終的な完成形が貨幣かへいなのだとも言っています。

なぜ、商品が価値なのか。そのひとつの理由を、マルクスは「⑤ 商品とは人間の労働時間が凝固こうこくしたものだ」と説明しています。

注1 フランク・シナトラ、二十世紀のアメリカを代表する歌手・俳優。

注2 寺山修司、短歌、演劇、俳句、現代詩など幅広い分野で活躍した人物。

注3 都々逸、三味線と共に歌われる、七・七・七・五音の定型の歌謡。

しかし、もし、人間の労働時間だけが商品の価値を決定付ける条件ならば、わたしたちの商品世界は、今ほど複雑怪奇なものにはならなかったはずだ。人間は本来平等であり、その人間の労働時間が商品に価値として凝固するのであれば、そこには不当に高額な商品もなければ、商品ならざるものが流通することもないわけです。そして、もし労働が均一の対価と交換されるのであれば、一所懸命働けば誰もが恒産こうさんを得ることができるとあり、「働かざる者食うべからず」という言葉も納得がいくわけです。しかし、現実にはそうではありません。(中略)

学生時代のわたしは、渋谷、新宿の裏町を毎日のように彷徨さまよっていました。一九七〇年代の中頃には、そんな学生が何人もいました。歩き疲れたときは必ず喫茶店に立ち寄り、あまりおいしいとは言えないコーヒーを飲みながら、タバコを吸い、本を読み、友人と待ち合わせて議論をしたりしたものでした。当時は、町のいたるところに喫茶店がありました。ほとんどは一人か二人で店を切り盛りしているような小さな喫茶店で、いつ行っても客はわたしの他に数人いるだけです。その空間は、当時のわたしのような無為むゐ徒食ととくの青二才が、安心して荷をおろし、くつろげる数少ない場所だったのでした。

渋谷の道玄坂みちげんざかを上っていくと、「ライオン」という名曲喫茶注6があり、コンサートホールを模したつくりの薄暗い部屋の正面には、一階席・二階席ぶち抜き巨大なスピーカーがあり、客席を威圧ゐあつしていました。わたしは時折、高田馬場にある大学に通うための山手線を途中下車して、道玄坂を上っていきました。ついには毎日入りびたり、日がな一日そこで過ごすことになったのです。

何もすることがないのに、いつもの決まった座席に座り、詩や評論やときには小説家のまねごとをして過ごし、夜になると仕事終わりのサラリーマンの列に交つて家に戻りました。

わたしは、実家の二階に暮らしていましたが、実家と棟続きむねつづきの工場で働く両親は、わたしが毎日、大学へ通っていると信じているようでした。わたしは、学費を出してもらっているうえに、大学にも行かず、毎日喫茶店に入りびたつてに ⑥ を感じていたのですが、それ以外の生き方を見つ

けることはできませんでした。喫茶店には、どんな経済効果も期待できませんが、わたしにとっては町場の大学でした。もし、ライオンがなければ、わたしは実家の二階に引き籠こもっていたでしょう。ライオンは、わたしと実社会をつないでくれる数少ない場所だったのでした。

町には、⑦ こういう場所が必要なのだ。あの頃を思い出したたびに、わたしはそう思うのです。(中略) 一九八〇年代の終わり頃、町から喫茶店が姿を消し始めました。ドトール注7一号店が、原宿の駅前にで

注4 恒産を得る、安定した収入や財産を手に入れる。

注5 無為徒食、何の仕事もせず、ぶらぶらと遊び暮らすこと。

注6 名曲喫茶、クラシック音楽をゆつくりと鑑賞するための喫茶店。

注7 ドトール、全国に多くの店舗を展開するコーヒーチェーン店。

きたのが一九八〇年。わたしは間近で翻訳会社を経営していましたので、この店のことをよく覚えています。狭いが清潔な店舗は、立ち席だけだったように記憶していますが、コーヒーの味がそれまでの喫茶店のものとは段違いによかったのに驚いたものです。

それでもわたしは、ドトールではなく、煮詰めたようなコーヒーを出す喫茶店に通い続けました。

一九九六年には、銀座にスターバックスが進出してきました。この全面禁煙のチェーン店に最初入ったとき、「⑧」と言われていた気がしたものです。

その澄ましたような雰囲気、「カフェなんとか」という聞いたこともないコーヒーの種類。いったい、ここは何をする場所なのかと感じました。

しかし、これらのチェーン店が街角に現れるようになるにつれて、町から従来型の喫茶店が少しずつ消えていきました。確かに、チェーン店で一杯二〇〇円のコーヒーを出されれば、町の喫茶店は競争しようがありません。

そもそも、喫茶店商売というものは儲かるものではありません。チェーン店より高い一杯四〇〇円のコーヒーを、一日三十人の客が飲んでくれたとしても、一万二〇〇〇円にしかならないのです。そこから原価や諸々の諸経費を差し引けば、利益など出ません。

八〇年代中頃の土地バブルによって、土地はそれ自体が利益を生む、金の卵を産むガチョウになりました。土地所有者が、細々とした喫茶店からの上がりを持つよりは、マンションや駐車場にして、効率よく資産運用したいと思ったとしても不思議はありません。喫茶店のあった場所がコインパーキングに変わっているのを見るのは辛いのですが、それはこちらの勝手な都合というものです。

これらの理由以上に喫茶店減少に拍車をかけたのは、日本人のライフスタイルの変化だろうと思います。どういうことかということ、喫茶店の椅子に座ってポーツと半日を過ごすような人間が生きていくのが、難しい時代になったということです。当時のわたしは、今を生きていることを想像すると、アルバイトの収入では食べるのがやつとで、コーヒー代を払って無為の時間を過ごす余裕は、どこを探しても見つからないように思えます。

あの頃は、何であんなに余裕があったのだろうかと思議です。喫茶店主にしても、お客にしても、非効率率のモデルのような場所が喫茶店だったのです。それでも、町のあちこちに喫茶店が存在し、やっていけたわけです。無為の時間を生み出す場所がやっていける時代だったのです。

喫茶店での無為の時間とは、本を読んだり、書き物をしたり、議論を戦わせたりする時間であり、文化が育まれる場所でもありました。こういう文化自体が廃れ、人々は駅前で朝のコーヒーを飲んで仕事へ向かい、バリバリと稼ぎを増やすことに熱中し始めました。

いやそうしたくてしているわけではなく、そうせざるを得ないから時間を刻んでいるのです。いつの間にか、日本は東アジアの発展途上の文化国家というよりは、経済発展が極点にまで達した経済大国になっていったということです。(中略)

注8 スターバックスドトールと同じく、全国規模の展開をしているコーヒーチェーン店。

■ 脚註

今年、わたしは友人たちと地元の町に喫茶店を開業しました。町に自分たちの根拠地をつくりたいという理由から、資材を集め、本を運び入れ、古道具を並べました。

五反田から出ている東急池上線というローカル線の、地味な駅で降り、ちよつと未枯れた感じの商店街を抜けた場所にある店が、わたしと友人たちの新しい根拠地になりました。喫茶店の椅子に座り、熱いコーヒーをすすりながら友人たちと至福の時間を過ごしていると、こういう時間をつくり出すためにわたしたちは働いているのだと実感されます。

この喫茶店をつくるにあたって、わたしと友人たちにはひとつの約束がありました。それは、この喫茶店で利益を出そう、儲けようと思っただけでいいけない、ということでした(喫茶店でろくな利益が出るわけもないのですが)。何とも、反資本主義的ですが、わたしたちは、何かのためにではない大切なことのために、働くべきであるという思いを共有していたのです。

わたしたちが、あくせく働く理由の大半は、お金儲けのためです。おそらくは、誰もそれを否定することはできないでしょう。しかし、よく考えてみると、お金儲けのために働くというのもしおかしな話です。

お金にはどんな使用価値もない。交換価値があるだけです。わたしたちは、そのお金を何かと交換したいと思っっている。いつでも、何かと自由に交換できる状態を得るために働いています。

それでいて、本当は、自分が何を欲しいのかについてよくわかっているわけではありません。いつの間にか、「お金持ちである自分」が目標だというのは、本末転倒です。

この時代、というのは効率化が最優先する時代において、もつとも貴重なものとは何か。わたしなら、それは「⑩」であると言いたい気がします。わたしたちの喫茶店には、コーヒーの他には何もなければ、「⑩」だけはたっぷりあるのです。

(平川 克美『路地裏の資本主義』による)

問一 —— 線部①「もしも心がすべてなら、いとお金はなんになる」とありますが、どういうことですか。その説明としてもつとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人間の心はうつろいやすく、お金に比べると頼りにならないものだが、それでも人間にとってお金よりも心が大切だということ。
- 2 人間の心は何よりも大切にすべきものであり、心を重んじる姿勢がなければ、いくらお金があっても意味がないということ。
- 3 人間の心を重んじる姿勢ももちろん大切だが、生きていくためにはそれだけではだめで、お金も必要であるということ。
- 4 人間の心はどんなに大切にしても裏切られるので、私たちの生活を支えてくれるお金を大切にすべきだということ。

問二 に入れる表現としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 偽善者ぶりに対するからかいの響き
- 2 温かい人間性を大切にす昔の価値観
- 3 理想主義を高らかに宣言する心意気
- 4 お金の万能性信仰に対する痛烈な批判

問三 ——線部③「金銭一元的な価値観」とは、ここではどのような価値観のことを指していますか。次の説明の空欄に合うように二十文字以上二十五字以内で答えなさい（句読点、記号も一字に数えま

す）。

お金は

という価値観。

問四 ——線部④「この」とありますが、この語がかかっている部分としてもっとも適切なものを次の1〜7の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 すべてのものと
- 2 交換可能な
- 3 お金という
- 4 商品の
- 5 万能性が
- 6 信仰の
- 7 対象に

問五 ——線部⑤「商品とは人間の労働時間が凝固したものだ」とありますが、どういうことですか。「凝固したものだ」という表現を、あなたの言葉でわかりやすく言い換えながら、次の説明の空欄に合うように二十文字以上二十五字以内で答えなさい（句読点、記号も一字に数えます）。

商品とは

ものだということ。

問六 に入れるのに適切な言葉を考え、五字以内で答えなさい。

問七 ——線部⑦「こういう場所」とありますが、どのような場所のことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 目標を見失った人々の居場所として開かれているため、筆者のように社会との接点を持つことが難しい人も受け入れてくれるような、豊かな可能性あふれる場所。
- 2 手軽な値段で商品を提供してくれるため、筆者のように安定した収入がない人でもいつでも気軽に立ち寄ることのできるような、身近で親しみやすい場所。
- 3 社会とつながる機会を得られる空間であるため、筆者のように決まった生き方を見いだせずにいる人でも様々な経験を積むことができる、温かく安心感に満ちた場所。
- 4 多様な価値観を持つ人々が集まってくるため、筆者のように周囲と打ち解けることが苦手な人でも価値を認めてもらうことができる、寛容で心が落ち着く場所。

問八 に入れるのにもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 こういう場所をあなたは知らんだろう
- 2 ここにあんたの居場所はないよ
- 3 こういう場所はあるあなたは嫌いだろう
- 4 ここについてあなたはと思うかな

問九 — 線部⑨「日本人のライフスタイルの変化」とありますが、どのような変化のことですか。その説明としてもっとも適切なものを次の1〜4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 日本人はかつては目先の利害関係とは関係なく無駄だと思われることにも目を向ける包容力があつたが、仕事の現場などでより高いレベルの成果が要求されるようになり、そうした無駄な要素を切り詰めるようになったこと。
- 2 日本人はかつては特に目的もないままに無為な時間を過ごすだけの精神的余裕を持っていたが、八〇年代中頃以降の土地バブルをきっかけに効率的なお金の使い方が求められるようになり、安価な商品を提供する店が好まれるようになったこと。
- 3 日本人はかつては経済的な発展よりも文化的な資質を育てることに意義を見出す価値観を共有していたが、そのような文化が廃れたために人々が熱中できるものがなくなり、人々がやむを得ず経済活動に関心を持つようになったこと。
- 4 日本人はかつては喫茶店のような簡単な仕事でも効率的に利益をあげることができたのだが、大手チェーン店の参入によってより効率的な店舗経営の必要が生じ、小規模な喫茶店が急激に減少したため、多くの客も大手チェーン店を利用するようになったこと。

問十 二つの ⑩ には同じ言葉が入ります。もっとも適切な言葉を漢字二字で本文から探し、抜き出して答えなさい。

■ 問題 2000

三 次の — 線部①〜⑧のカタカナの部分の漢字で、⑨・⑩の漢字の部分をひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

- 入社するとたちまちトウカクをあらわした。①
- 数えあげていくとマイキヨにいとまがない。②
- これは私の好きな作家がアラワした随筆だ。③
- コシヨウしてしまった車の修理を頼む。④
- 大統領はシュウニンのあいさつで流行語を使った。⑤
- ハクアイの精神で誰に対しても敬意をもって接しよう。⑥
- 当然のキケツとして、受け入れざるを得ない。⑦
- この地域でとれるコクモツは麦だ。⑧
- すさまじい形相に驚いてしまった。⑨
- これは父に委ねるべきものだ。⑩

(以下余白)

